

吾妻川中流域における 縄文時代中期後葉の土器様相

— 加曽利 E I 式古段階を中心として —

山 口 逸 弘

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 吾妻川中流域の中期遺跡概観
2. 吾妻川中流域における加曽利 E I 式
古段階の土器群

2- (1) 加曽利 E I 式古段階 1

2- (2) 加曽利 E I 式古段階 2

2- (3) 加曽利 E I 式新段階～E II 式段階

まとめ

— 要 旨 —

本稿は、群馬県北西部にあたる吾妻川中流域における、縄文時代中期後葉土器群の様相を明らかにすることを目的としている。当地域は、八ッ場ダム関連発掘調査による中期資料が蓄積しており、その量は膨大なものになっている。それ故、中期後葉土器群全てを対象とはせず、加曽利 E I 式古段階に時期を限って、住居跡出土土器組成様相を提示した。

その結果、加曽利 E I 式古段階 1 では、「勝坂系」、「焼町類型」、「中峠式」諸類型、大木式、北陸式などとの住居内共伴が見られ、色彩ある異系統土器群の共存実態が見られた。加曽利 E I 式新段階では、「勝坂系」、「焼町類型」が客体的になり、加曽利 E I 式、中峠式諸類型が土器組成の中核に座る様相を提示した。さらに次代の加曽利 E I 式新段階～E II 式段階の土器組成も概観し、加曽利 E I 式併行の土器と伴に、曽利式あるいは「唐草文系」土器や「栃倉式」「郷土式」の共伴例を観測した。

吾妻川中流域における加曽利 E I 式古段階の土器組成は、群馬県内平野部と大きな地域差は見られないが、古段階後半から新段階に至る間に信州系土器との組成が見られ、組成格差が認められる。

キーワード

対象時代 縄文時代中期

対象地域 群馬県北西部

研究対象 縄文時代中期後葉土器群

はじめに

かつて、縄文時代中期環状集落遺跡としては、渋川市赤城町三原田遺跡が著名な例として扱われてきたが、今や、中期環状集落跡は県内各地に広がりを見せている。

群馬県内の中期遺跡としては、三原田遺跡をはじめ、道訓前遺跡・房谷戸遺跡・小室高田遺跡などの赤城山西～西南麓の良好な遺跡群が知られる。一方、新堀東源ヶ原遺跡・下鎌田遺跡・砂押遺跡などが分布する西毛地域の濃密な集落群が、これまで調査されてきており、長野県域との関連性が注目されている。また新たに、東毛地域にも調査が及び、県内に広く中期集落遺跡が点在する様相が明らかになってきている。それに伴い、環状集落周辺の小規模な中期集落遺跡も知られるようになった。環状集落を拠点集落として位置付ける研究視点も重要であったが、今後は小規模中期集落遺跡と大型環状集落との関連など、集落研究としても着眼点や課題が未着手のままである。一方、出土資料は各地域とも量的に多く、特に土器資料は、特徴的な中期土器文様を中心に研究蓄積が果たされつつある。中期土器編年研究は、各集落跡の報告書刊行を重ねる毎に試みられ、土器の様相は明らかに、現在は広域編年作業が試みられている。

一方、北西毛地域にあたる吾妻川中流域は、平成7年にハッ場ダム開発関連に伴う調査が着手され、当初より長野原一本松遺跡と横壁中村遺跡が中期大規模集落跡として、注目を浴びてきた。現在2遺跡とも整理途中のため、その全容は確定していないが、報告書も長野原一本松遺跡が5冊、横壁中村遺跡が12冊を数え、その様相は徐々に明らかになってきているといえよう。無論報告書刊行に従い、各報告書で出土土器群を扱った研究も蓄積されてきている。長野原一本松遺跡では、諸田康成氏による出土土器の詳細な分類を踏まえ（諸田 2002）、小野和之氏による出土土器の位置付けがなされている（小野 2007）。また横壁中村遺跡では、藤巻幸男氏が中期土器をまとめられている（藤巻 2007）。このように、各氏の精力的な土器分析が重ねられて現在に至るが、あくまでも当該遺跡出土土器に限られた分析であり、ハッ場ダム調査地域を総括した分析には至っていない。これは、長野原一本松遺跡及び横壁中村遺跡ともに整理作業が途中であり、未報告資料もまだ少なからず存在するためでもある。いずれは両遺跡報告書が揃った際に、詳細な分析が行われるものと期待されよう。なお、筆者も及ばずながら、中期住居跡出土土器を中心に、埋嚢の在り方を問うたが、分析は途上であり、多くの反省点を残す（山口 2008）。

さて、ハッ場ダム調査が17年を経過するに、筆者も、当地域の中期土器様相を明らかにすべく、今回当該時期の資料に取り組んだが、その量はあまりにも膨大なため、今回は加曽利EⅠ式古段階に時期を絞り、出土土器群の

地域的な傾向を提示したい。

将来的には、中期初頭～前葉や中期後葉の土器群を扱いたい所存である。

1. 吾妻川中流域の中期遺跡概観（1図）

吾妻川中流域は群馬県北西部にあたる。吾妻川下流は渋川市白井で利根川と合流し、そのまま関東平野に広がる。一方、吾妻川上流域は上信国境に接するように、関東と長野県域―信州地方を結ぶ興味深い地理的な条件を示す。また、三国山脈を隔てて、長野県北部や新潟県と接しており、いわば千曲川―信濃川流域と吾妻川―利根川流域の関係を予想できる位置でもある。

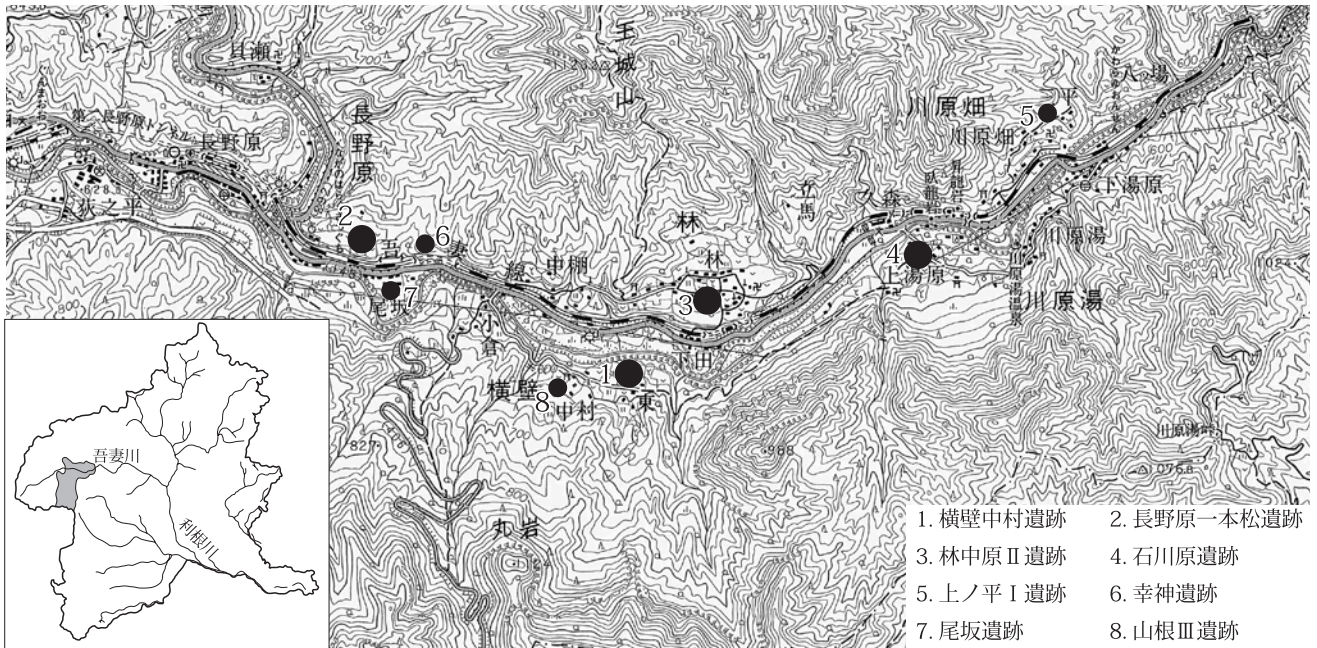
ハッ場ダム調査が着手される以前は、吾妻川中流域の縄文時代中期集落遺跡としては、長野原町勘場木遺跡（桜岡 1988）が知られる程度であった。勘場木遺跡は保存整備されているとはいえ、個人の発掘・出土品所蔵という内容であり、集落遺跡としての位置付けには至っていない。ただ、出土土器に関しては、既に信州系の土器群との共存が指摘されており、当地域の中期土器群の特徴が世に問われることになった重要な遺跡である。

ハッ場ダム調査関連では、先に述べた長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡以外に、中期資料を検出した遺跡としては、上ノ平Ⅰ遺跡（瀧川 2008）、山根Ⅲ遺跡や幸神遺跡（中沢他 2008）、尾坂遺跡、林中原Ⅱ遺跡、石川原遺跡などが調査されている。吾妻川両岸に位置する遺跡で、長野原町内に所在する。この中期遺跡群にあり、長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡は、ともに大規模な環状集落であり、一つの地域で、環状集落2遺跡が調査された例として、破格の内容を提示している。

ハッ場ダム関連調査ではないが、勘場木遺跡に近距離にある長野原町坪井Ⅱ遺跡（富田 2000）も中期後葉集落跡としてまとめた資料を出土する。さらに上流域では、嬭恋村今井東平遺跡（松島他 2005）でも、中期資料が充実している。下流域になるが、東吾妻町郷原遺跡、小泉宮戸遺跡も小範囲の調査ながら、良好な住居跡一括資料が報告されている（藤巻他 1985・高橋他 2003）。

上記の遺跡は、吾妻川が形成する河岸段丘上に占地し、上位段丘面と中位段丘面に集中する傾向を見せる。当地域は吾妻川両岸に山地地形が迫り、そのため全体的には急傾斜地形を見せる。縄文時代集落は傾斜地形にあって、点在する段丘平坦面を選んで、居住地を設営するようだ。これらの段丘面調査では、中期集落跡以外にも、早期～前期・後期集落跡が検出されており、複合的な遺跡様相を示す。おそらく、周辺の急傾斜地形に制約され、数少ない段丘平坦面に各時期の集落が集中するためであろう。

中期集落は、比較的広い段丘面を選ぶ傾向がある。そ



1 図 吾妻川中流域の主な縄文中期遺跡(国土地理院 5 万分の 1 地形図「草津」使用)

の中で、長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡ともに周辺段丘面では、広大な面積が保証された地点に占地しており、拠点集落としての条件を備えた立地といえよう。出土土器を見ると、両遺跡とも中・後期を中心としており、横壁中村遺跡の時間幅が若干広く、中期だけを概観しても、横壁中村遺跡は勝坂式段階から加曽利 E IV 式まで、比較的継続した土器様相が見出せるが、長野原一本松遺跡は、後出の集落跡なのか、加曽利 E I 式新段階から加曽利 E IV 式に集まる傾向が見られる。

このように、吾妻川中流域における中期遺跡としては、長野原一本松遺跡と横壁中村遺跡が屈指の内容を示している。本稿を進めるに、特に横壁中村遺跡に加曽利 E I 式古段階の資料に注目し、当地域の様相を垣間見てみたい。出土土器の検討は住居跡一括資料を重視し、個別単体の資料に関して、今回は除外している。住居跡遺存度も良好な例を検索したが、良好な例だけに限ると、極端に分析対象が少なくなる。今回はあえて重複のある住居跡や掘り込みの浅い例も加えた。なお、加曽利 E 式土器の編年観は埼玉編年(谷井・細田 1992)に準拠し、ローマ数字を使用しているが、群馬県における特徴的な土器群、例えば「焼町類型」などの在り方も考慮にいたため、若干の誤差が生じている¹⁾。

2. 吾妻川中流域における加曽利 E I 式古段階の土器群

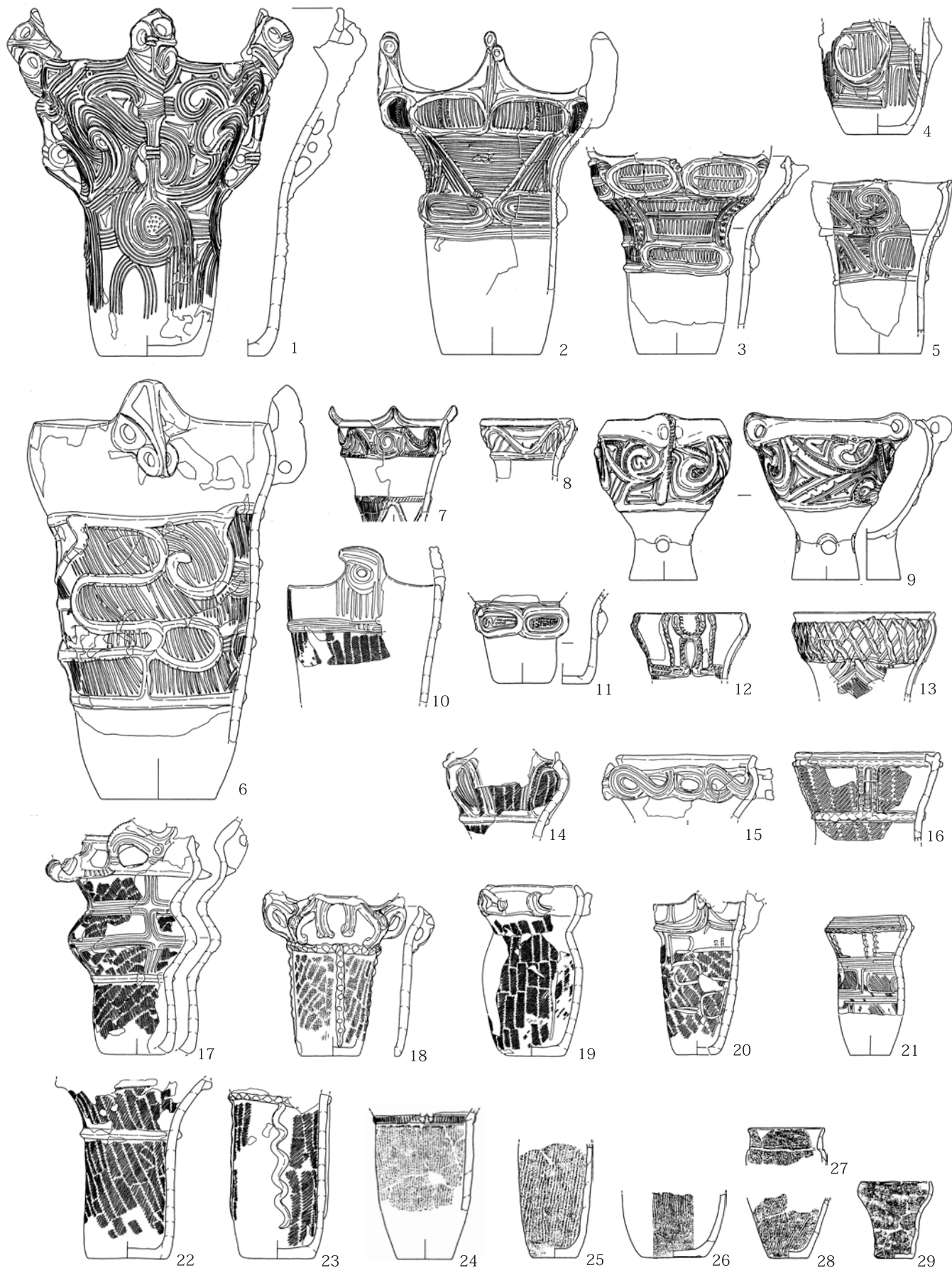
各地で環状集落を形成する時期としての加曽利 E 式土器群にあって、加曽利 E I 式に相当する土器群は、口縁部文様帯内の渦巻状突起と区画文構成を基準としている。また、筆者が「勝坂系」とした一群の共伴例が際立つ群馬県の概期土器組成では、上記の口縁部渦巻文と区

画文構成から外れる土器群も概期として考えている。ここでは、出土土器の組成を中心に考えを巡らせるが、個別の土器自体の時期特定にまでは至らない。これからの課題としたい²⁾。なお、実測図の掲載については、上ノ平 I 遺跡は 1:8、その他は個体図示が 1:6、破片図示を 1:4 を原則としたが、報告書によっては、不明な例もあり、厳密な縮尺ではない。ご容赦願いたい。

(1) 加曽利 E I 式古段階 1

筆者は、前述した上ノ平 I 遺跡に注意を払い、31 号住居跡出土土器を取りあげ(山口 2009)、「勝坂系」土器の様相を吟味した経緯がある(山口 2010)。その際、県内の同時期の様相を概観し、概期土器群にある「勝坂系」の在り方を問うた³⁾。しかしながら、周辺遺跡ー吾妻川中流域で出土した資料に対しては積極的に扱っておらず、吾妻川中流域の様相が不分明のまま、県内資料との比較などを行った反省が残った。ここでは、再度上ノ平 I 31 号住居出土土器を掲載し、当地域における中期後葉初頭段階の土器様相を概観してみたい。

上ノ平 I 31 号住(2 図)は、円形の平面形を示し、掘り込みの深い良好な遺存度を誇る住居跡である。出土土器も多量で、埋土中～床面にかけて集中し、一括性に富む資料として評価される。既報告資料ではあったが、筆者は土器正面観などを重視し、再実測を施し紹介に至っている。出土土器は加曽利 E I 式古段階に比定され、異系統土器群の共存を具体化し、かつ多様性に富んでいる。詳細は報告書(瀧川 2008)及び拙稿(山口 2009・2010)を参照していただき、ここでは概略を述べる。



2 図 上ノ平遺跡 31 号住居跡出土土器 (山口 2009 より)

1~29=1:8

1～5は「焼町類型」およびその変化形と位置付けた。1以外は、体部文様帯が区画文あるいは単位文が配されており、この時期の「焼町類型」としては、文様構成の変化が窺われよう。6～11は「勝坂系」と判断した。大型深鉢6は勝坂3式の系譜を引く文様構成だが、体部区画文などに変容要素が見られ、「勝坂系」と判断した。また、10を信州地域からの搬入品として考えた。12～22は、縄文施文する一群であるが、15は中峠式諸類型の一つである「三原田類型」、17はあるいは大木8a式新と判断したように、縄文施文の一群といっても様々な型式や類型を含む内容である。22・23などの体部のみの残存だと、勝坂3式・「勝坂系」の可能性もあるように、縄文施文のみで、中峠式あるいは大木式と確定はできない。

このように、上ノ平Ⅰ31号住は「焼町類型」、「勝坂系」、大木式系、中峠式諸類型などからなる異系統土器群の共存が果たされた土器組成を示す良好な例と位置付けられる。「勝坂系」とした土器群内部にも信州からの「搬入」を窺わせる例(10)や群馬県域独自色の強い一群(6～9・11)が見られ、極めて興味深い関係性を窺わせている。

上ノ平Ⅰ遺跡ではこの他に18号住居跡において、中

峠式と「勝坂系」・「焼町類型」、「道訓前類型」⁴⁾などの共伴を見る事ができる。31号住、18号住ともに、当地域の中期中葉末から後葉への土器組成変化を知る上で重要な遺跡である。

次に、横壁中村遺跡の住居跡出土資料をみてみよう。

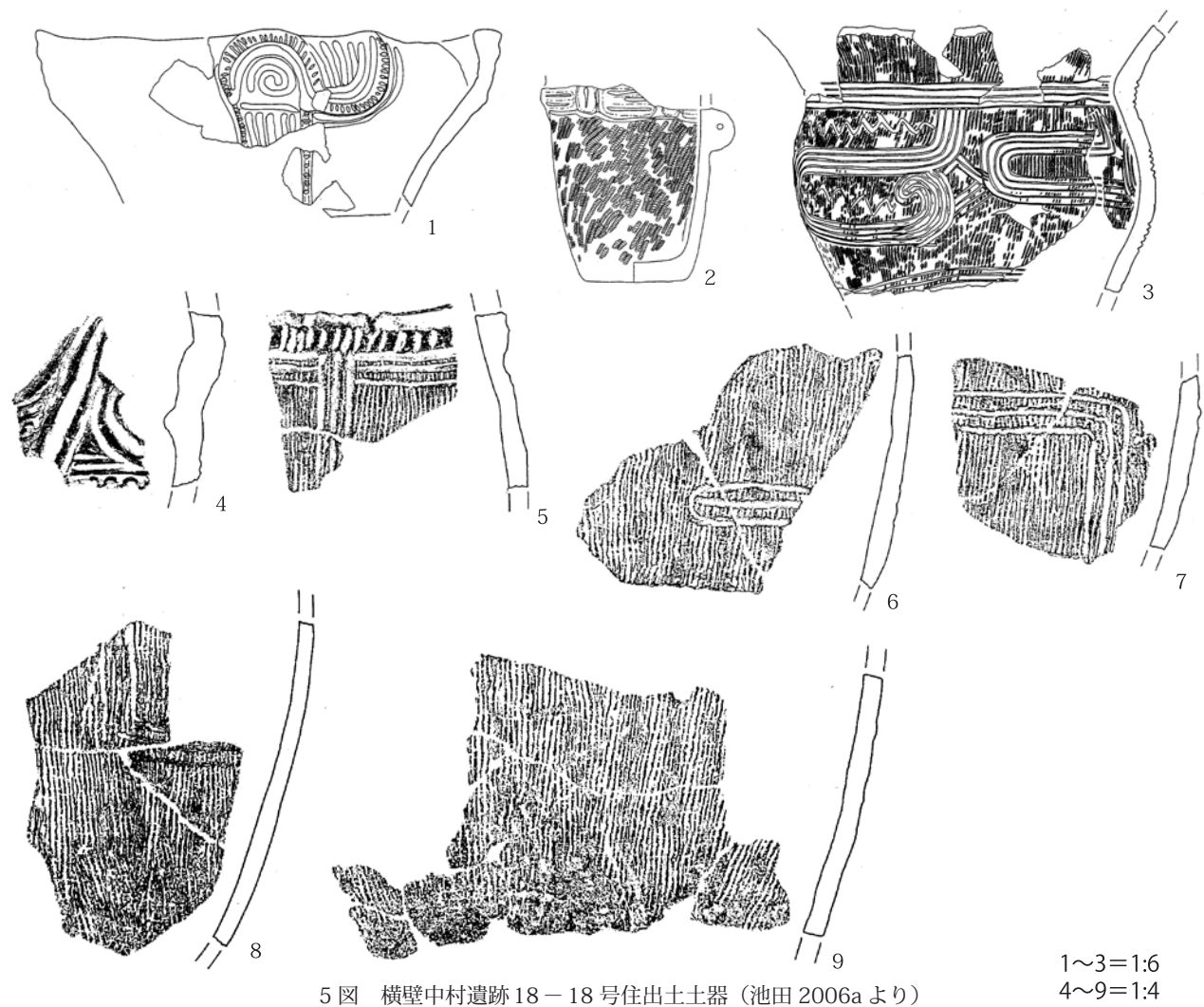
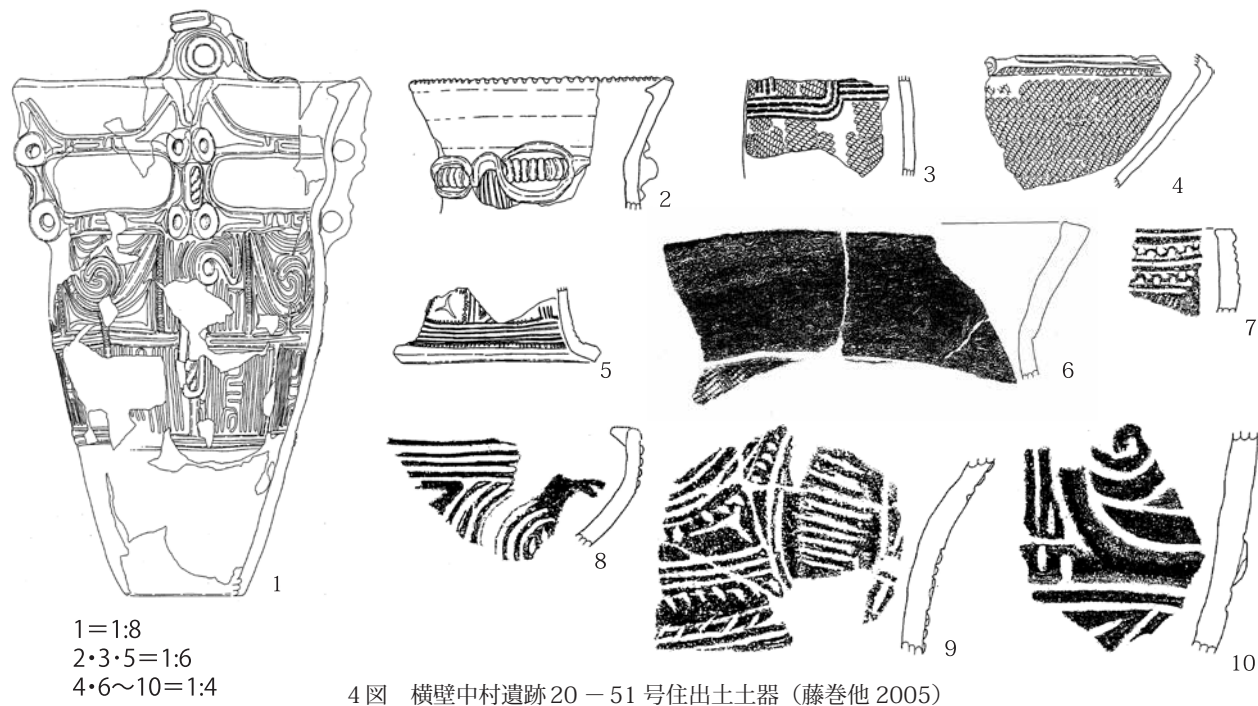
加曽利Ⅰ式古段階でも古相を呈す例として、18区10号住居跡と20区51号住居跡・18区18号住居跡出土土器を挙げる。上ノ平Ⅰ31号住出土土器とほぼ同段階と考えている。

18区10号住居跡(3図)は単独の検出で、不整楕円状の平面形を呈する。掘り込みもあり遺物は炉周辺からまとまっていることから、一括性は高いものと判断できよう。10号住1は「勝坂系」と考えたが、勝坂3式として、やや遡る要素もあり、検討を要しよう。双環状の口縁部大型突起を設ける。無文口縁部は内湾しており、当該期の特徴を見せる。頸部はやや幅狭の文様帯を配し、橋状把手を付す。橋状把手は突起下にも付けられ、縦位二連の突起配置である。また、体部上半の区画内充填沈線は、深く施文され、「焼町類型」側線や充填沈線に近い文様要素である。2は「焼町類型」であるが、四単位波状口縁を呈し、体部中位に横位隆線を配することにより体部上半を区画文化している。体部に三角区画文を充てており、



3図 横壁中村遺跡18-10号住出土土器(藤巻2006より)

1～3=1:6
4～8=1:4



末期的な様相であろうか。3は縄文施文を器面全体に施す土器。逆三角形の口縁部突起下と頸部に付された橋状把手は1と類似する。縄文施文という特徴などから、「勝坂系」よりも中峠式的な関連を窺わせる。伴出した破片類も同様な土器組成を示しているが、6は横位S字状意匠を配した口縁部破片で、中峠式の「台耕地型深鉢」・「三原田類型」に近い資料である。

20区51号住居跡(4図)は明瞭な壁ではないが、炉と覆土中の礫下より多量の土器が集積していたことから、一括性に富む出土状態といえよう。51号住1は大型の深鉢である。「勝坂系」と判断したが、10号住1や上ノ平31住6と同様に勝坂式の伝統を強く保持した例といえよう。口縁部は多段化し、隆線による区画文配置であるが区画内は無文である。下段は内湾部を充てており、内湾する無文口縁と同等の構成とみることができよう。体部は横位隆線による2帯区画文構成で、渦巻文や縦位沈線が充填される。口縁部突起下と頸部に小型の双環状把手を縦位に配しており、18区10号住1の把手配置と同様な例と見られる。2は厳密な「焼町類型」ではないが、曲隆線文系の土器であろうか。頸部に配された隆線による楕円状区画文は上ノ平I 31号住3との共通性が窺われよう。また、鋸歯状口縁は、当該期の勝坂式や「焼町類型」には積極的な文様とはされておらず、検討を要しよう⁵⁾。3は体部のみの残存だが、縄文施文で内皮沈線によるクランク文が配される。群馬県域の中峠式諸類型に見られる文様である。4は浅鉢である。体部に縄文が施文され、強く屈曲する頸部が特徴的である。なお、同様な破片が20区64号住でも出土しており、口縁部は横位沈線と刺突文が充填される文様である。北陸～越後地域の浅鉢と判断できよう。5に関しては、器形及び文様は当地域に例が無く、判断を控えたいが、台付土器脚部という要素からは、北陸地方に類例を求めるべきであろうか。

18区18号住居跡(5図)は円形の整った形状を示す残存度の良好な住居である。石囲い炉内の炉体土器2があり、周辺から1・3がまとまることから、一括性は保証される。

1は勝坂3式の特徴を突起及び無文口縁部に集中するが、体部を欠損するため詳細な判断はできない。上ノ平I 31住21に類例を求めることも可能であるが、両者とも体部を欠く。あるいは、拓本で示した6～10のような燃糸地文で沈線による意匠文が配される体部文様が予想されよう。2は体部縄文施文する例であるが、上半に幅狭の文様帯を見る。小楕円状区画が横位連接しており、これは「焼町類型」の文様構成に多々見る文様帯である。3は体部の沈線によるクランク文が特徴である。20区51住3と同様の意匠であり、さらに上ノ平I 31住17・20・21にも見られる例である。大木8a式文

様の一部や中峠式諸類型に系譜を求めることも可能であろう。

小結

上ノ平I 遺跡と横壁中村遺跡の出土資料から、加曽利E I 式古段階の中でも古相を示す住居跡出土資料を提示した。体部横帯文構成や区画文構成といった勝坂式の伝統を保持した「勝坂系」が大型品として組成の中核を占める在り方が理解されよう。文様構成としては、橋状把手縦位2連設定による、正面観の強調も注意しておきたい⁶⁾。「勝坂系」以外には「焼町類型」や中峠式諸類型、大木式系、さらには北陸～越後系の土器群が加わる組成である。この中で、大木系や北陸・越後系土器は量的にも少なく、やや客体的な存在を示しているようだ。組成の主体は「勝坂系」・「焼町類型」、中峠式諸類型と捉えられる。

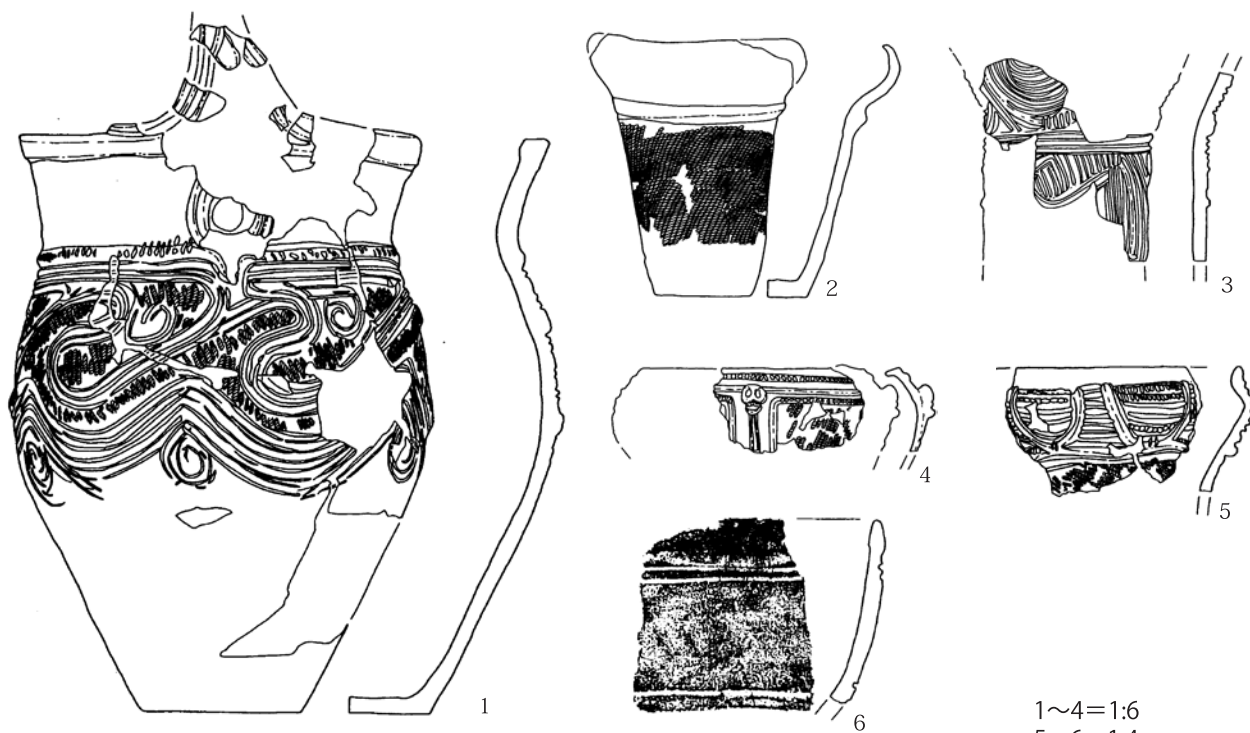
(2) 加曽利E I 式古段階2

次に、加曽利E I 式古段階でも新相を呈す土器群を見てみよう。ただし、加曽利E I 式古段階1とした土器群との時間差は大きく無いと考える。土器組成差を中心にして、加曽利E I 式新段階への過渡期を考えてみたい。

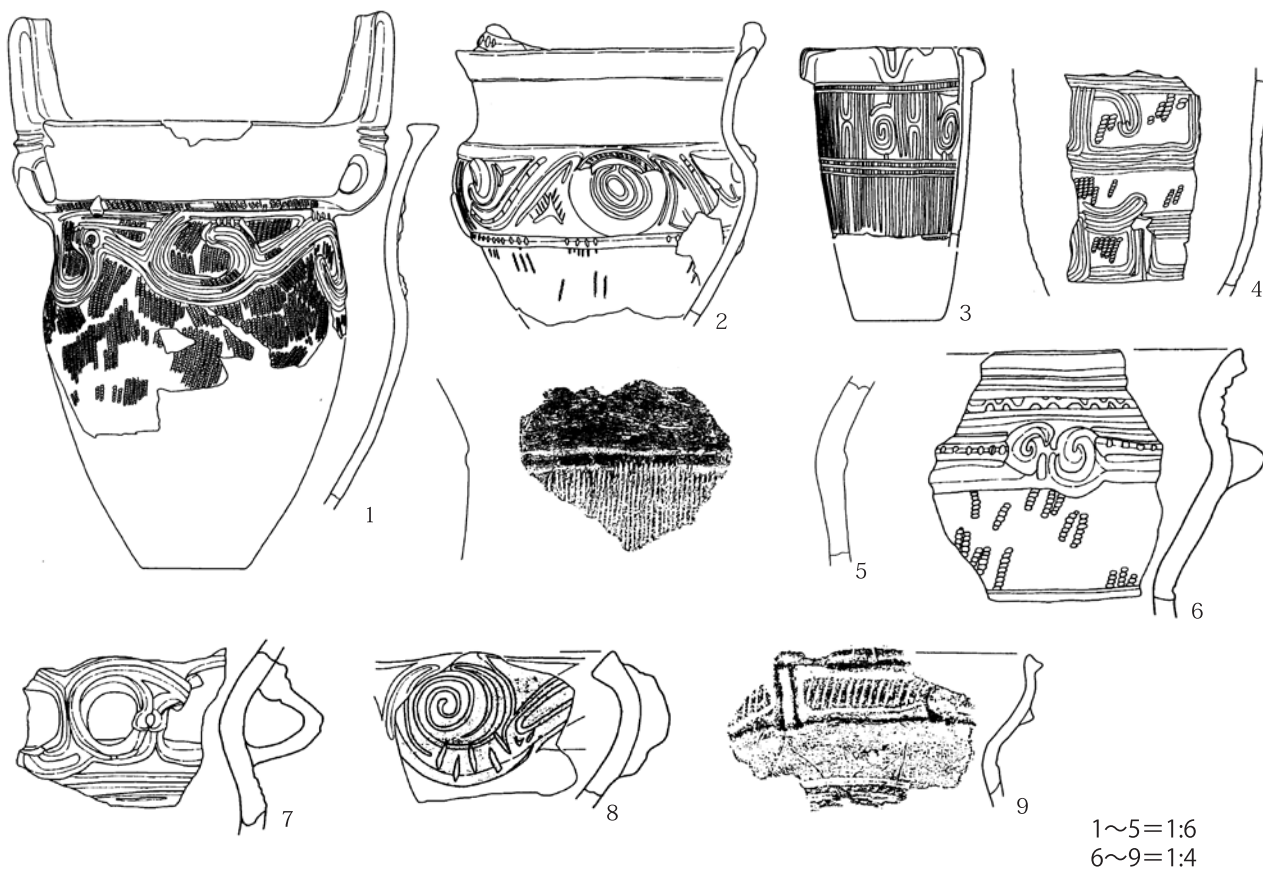
加曽利E I 式内部で収斂化に至る間でも、未だ前代の伝統を保持し続ける土器群が存在する時期である。具体的には変化した「勝坂系」、「焼町類型」が残るが、中峠式諸類型も組成の一部に加わっている段階といえよう。横壁中村遺跡28区14号住居跡・20区79号住居跡・20区8号住居跡・20区18号住居跡を挙げる。

28区14号住居跡(6図)は、浅く残存度の悪い住居であるが、単独の検出であり、遺物も床面にまとまることから、一括資料として判断した。2の小型深鉢が住居内土坑からの出土であるが、上層から他の土器群とはほぼ同時期と考えた。14号住1は大型深鉢であるが、口縁部大型突起と幅広の無文口縁部、体部上半の文様帯から「勝坂系」と判断した。しかしながら、隆帯とともに体部にまで縄文施文が及び、沈線による横位連繫意匠が配される例は、既に勝坂式の文様構成方法から離れ、さらに「勝坂系」としても変容を重ねた様相と見る事ができる。2は内湾する無文口縁部と体部縄文のみの構成で、勝坂3式から伝統的に製作される一群である。3は口頸部～体部のみで、遺存度が悪く判断に苦慮するが、曲隆線文の在り方から、「焼町類型」の変化形として捉えられよう。4・5は縄文施文の一群であるが、中峠式諸類型ではない。当該期の在地的な土器群であろうか。5の口縁部半楕円状区画文と横位沈線の充填手法は、当該期に見られる文様構成だが、両者とも破片資料のため、詳細な判断は控えたい。

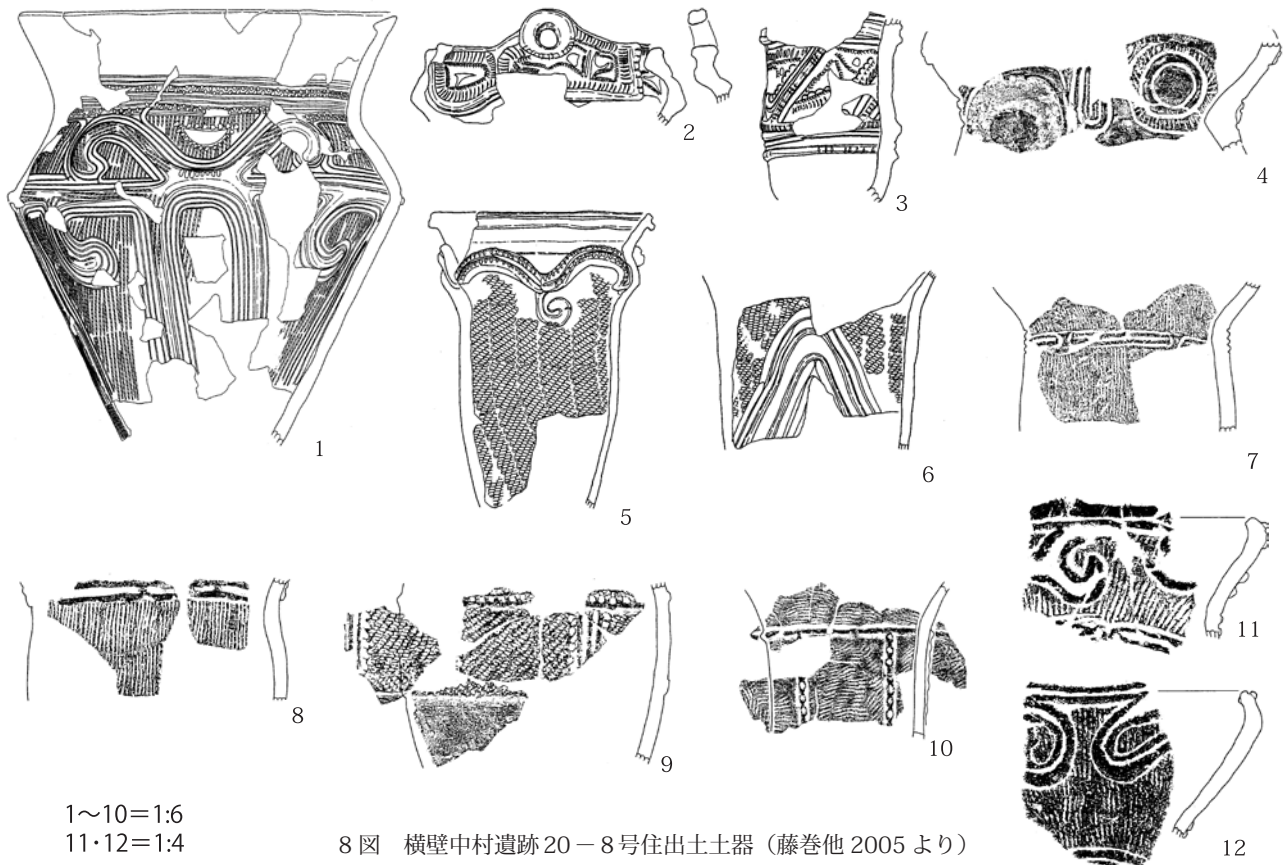
20区79号住居跡(7図)は比較的良好な遺存度を



6 図 横壁中村遺跡 28-14 号住出土土器 (池田 2006b より)



7 図 横壁中村遺跡 20 区 79 号住居跡出土土器 (藤巻 2007 より)

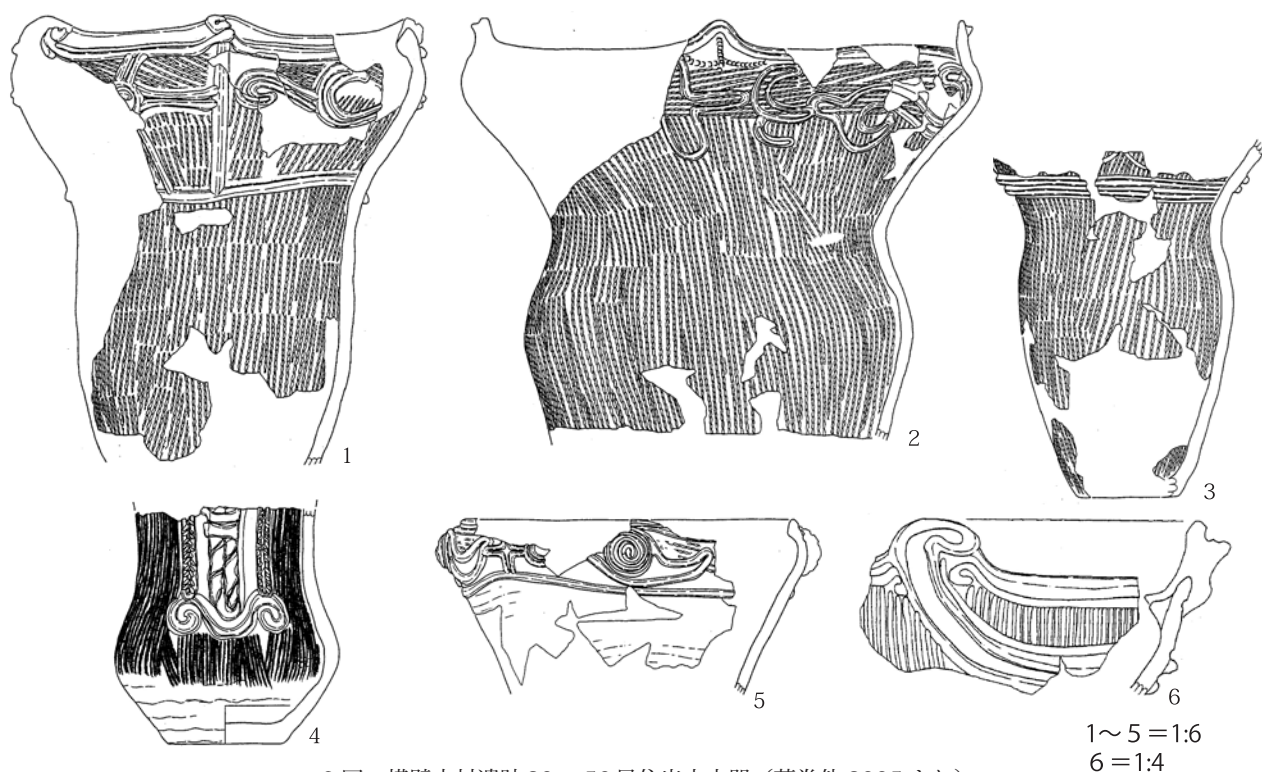


示す。円形の平面形を呈し、柱穴・炉も確定的な配置を見せる。炉内より3が出土し、その他の個体も覆土下位から床面にかけてまとまる。良好な一括資料といえよう。なお、上層にEⅢ式古段階の土器数点が混じるが、これらは流入と判断できる。出土土器量も豊富で、1~3を「勝坂系」と考えた。1は、口縁部大型突起を一对配し、無文口縁を設けた体部一帯構成の大型の樽状深鉢である。体部は隆線による渦巻文を配し、単位文として確立するが、各单位が横位に連繫し、独立した単位区画文としての構成ではない。勝坂系としても、新相を呈する例と見る事ができよう。2も樽状深鉢で、文様構成は1に似るが、2は体部下半に横位隆線を設けており、体部上半の文様を区画し、かつ文様帯の上昇を単一指向した構成方法である。「勝坂系」では県内で多く見るタイプであり、当地域では、上ノ平Ⅰ18号住でも同様の深鉢を見る⁷⁾。一方の、1の体部下半は開放しており、単位文の在り方の差が見出せる。そのためか、2に比して1が若干ながら新しい印象を得る。3は、いわゆる小型の筒状深鉢で炉跡出土である。筒状深鉢は勝坂3式より定着するが、加曽利EⅠ式古段階に、伝統的な立場として継続する様相として注意しておきたい。4は体部のみの残存だが、沈線による方形区画文構成である。区画内縁に接続して弧線文が配されている。体部クランク文と同等の文様構成と位置付けられよう。中峠式や大木式との

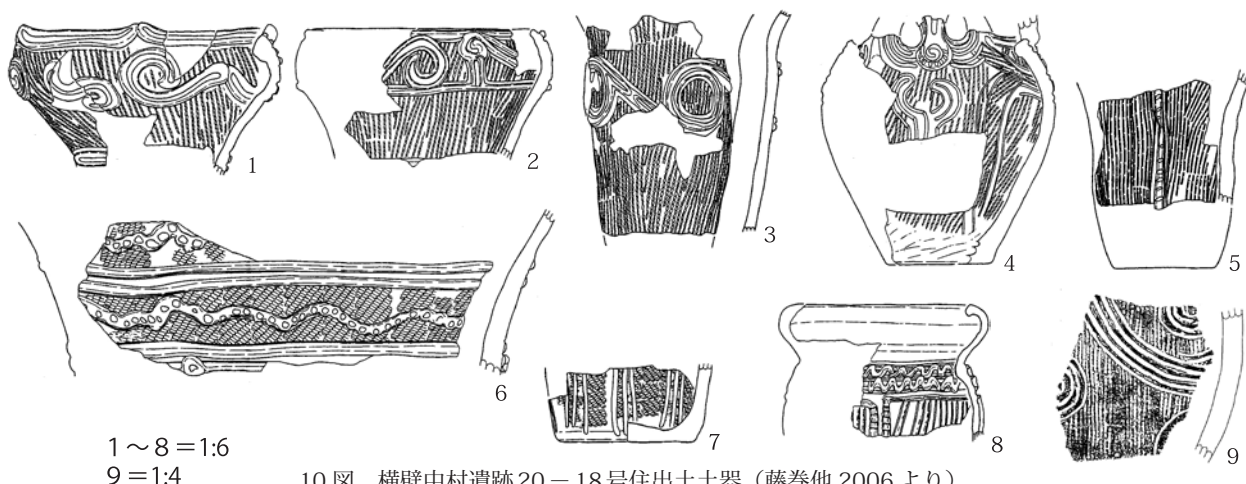
関連も考えたい。6~9は中峠式諸類型の口縁部や口頸部破片である。「O地点型深鉢」(6・8)、「三原田類型」(7)が見られるが、1~4と同時期の例と考えた。

20区8号住居跡(8図)も個体が揃うが、住居跡本体の遺存度は極めて悪く、出土土器の一括性は極めて乏しい。その中で、EⅠ式古段階の例を選んで掲載したため、住居跡の帰属時期あるいは個体観の同時性は保証できない資料である。ある程度の時間幅は覚悟しなければならない。

1は直線的に屈曲する大型の深鉢である。無文口縁部と体部2帯構成、撚糸施文は充填施文で隆带上にまで及ぶことから、「勝坂系」と判断した。ただ、「勝坂系」としても、体部上半・下半の文様帯とも半渦巻状意匠を充て、下半は懸垂文構成を示すように、中峠式諸類型との関係を窺わせる。頸部の横位交互刺突列なども、本来の「勝坂系」には採用される文様ではなく、中峠式あるいは加曽利EⅠ式に特徴的に見られる要素である。2は口縁部交互区画文構成の勝坂式と見られ、時期差が認められよう。3は同タイプの体部文様だが、蓮華文が付加されており、勝坂3式と判断できよう。2・3とも1とは時期差を想定したい。4は大型の環状意匠を口頸部に配した例で、勝坂3式・「勝坂系」に見られる個体である。5~12は、縄文・撚糸文施文する中峠式諸類型及び加曽利EⅠ式である。この中で5や口縁部破片の11・12



9 図 横壁中村遺跡 20-56 号住出土土器 (藤巻他 2005 より)



10 図 横壁中村遺跡 20-18 号住出土土器 (藤巻他 2006 より)

は、1 との共伴に妥当性が求められ、E I 式古段階の所産と考えた。5 は、「中峠式・台耕地型深鉢」の変化形であろうか。

本住居跡出土土器は、一括性には疑問符が付く。図示していないが、「焼町類型」の滑車状突起破片など時間幅を持つ土器片が一定量出土しており、共伴資料の抽出はできない。中葉末～後葉初頭の土器資料を量的に見る住居跡である。ただし、1 は極めて問題を包括する資料であり、当地域の E I 式古段階を考える上で重要な要素を提示するため、あえて提示した次第である。

加曽利 E I 式古段階の撚糸文を施文する一群を挙げよう。20 区 56 号住居跡の一括資料が良好である (9 図)。

住居跡として、2・3 が炉周辺から出土している。

56 住 1・2 は口縁部文様帯に横位 S 字状意匠あるいは十字状意匠を配す例である。1 は頸部隆線によって口縁部文様帯を画するが、2 は頸部を開放する文様構成である。文様意匠に類似性がありながら、文様帯分帯線の差異は何らかの文様構成方法の変異が想定できよう。加曽利 E I 式内部の文様構成方法の選択があるのかもしれない。3 も頸部隆線による口縁部文様帯分帯を果たしている。また、4 の体部下半例は屈折底を呈した、「勝坂系」とも判断できる資料である。加曽利 E I 式古段階から新段階に至る間まで、「勝坂系」が伝統的に残存する現象と捉えられよう。さらに一方、口縁部文様帯が確立

し、口縁部渦巻文と区画文が確立した個体も相伴している。5・6が該当しよう。5は横位に施された撚糸施文が看取され、頸部無文帯も設ける収斂的な様相を示している。6の口縁部区画文構成とともに、加曽利EⅠ式新段階への過渡期の所産と考えられよう。

20区18号住居跡は掘り込みも浅く、EⅡ式期の住居跡に切られる重複関係を示す。ただ、土器は床面に比較的まとまった出土状態を示しており、ある程度の一括性は保証されるものと考えた。本住居跡出土器も、撚糸地文の一群が揃う(10図)。「勝坂系」の撚糸文が比較的充填手法によるものとは差が見られる。1・2は口縁部文様帯に横位S字状意匠を設ける。加曽利EⅠ式土器として成立段階の様相といえよう。3の体部文様は、隆帯による環状意匠が横位連繫しているが、口縁部S字状意匠の体部への転写による変化形と捉えられ、加曽利EⅠ式と見ることができよう。4は口縁部に大型の双環状突起を付しており、「中峠式・0地点型深鉢」の変化形で考えておきたいが検討を要しよう。体部の沈線による対弧状意匠以下が懸垂文であろうか。5の外反する体部破片も撚糸施文で懸垂文構成を呈す。6は撚糸地文に環状あるいは渦巻状意匠が沈線で描かれる。5と同様な中峠式の一部であろうか。撚糸地文の一群に対し、縄文施文の個体も見受けられる。6は横位2条隆線で画された施文域に横位蛇行隆線を付し刻みを加える例、7は、3条の沈線による懸垂文構成下端部である。ただ、2個体とも全容が把握できる資料ではないため、判断に苦慮する。さらに、非縄文ともいべき信州系の土器も加わる。当住居跡出土土器組成では、異系統とも言うべき例が8である。無文口縁部が強く内湾し、頸部に蛇行隆線を貼付する。体部は内皮刺突を加えた細隆線による区画文を配するのであろうか。曾利Ⅰ式と考えた。当地域の加曽利EⅠ式古段階における信州系土器の浸透を垣間見る資料である。

小結

加曽利EⅠ式古段階のうち若干新相を示す土器群を集めて見た。前にもお断りしたように、古相を示す土器群との時間的な差は大きくないと考える。新相にいたっては、「勝坂系」の文様変化が観察され、中峠式諸類型や加曽利EⅠ式の恒常的な組成を見る事ができよう。一方、「焼町類型」は極めて客体的な存在になるが、破片資料は伴出しているので、消長をこの段階に求めるのは、一概には定めることはできない。

「勝坂系」は、加曽利EⅠ式古段階までは伝統的な土器群として、組成内で位置を保つが、古段階後半になると、徐々に加曽利EⅠ式や中峠式諸類型に取り込まれていくようだ。本稿でしめした、横壁中村20区8号住1がその具体例と考えた。「勝坂系」は、信州系の曾利式

や「唐草文系」には直接的には変化せず、断絶する類型群として、加曽利EⅠ式新段階には消長を迎えるのであろう。

おそらく、1・2と分けた加曽利EⅠ式古段階においては、土器組成の内容は大きな変化を見出せないだろう。その中で、「勝坂系」は勝坂式の伝統的な文様構成は希薄になる。区画文や横帯文構成への固執は薄らいでいくと思われる。すなわち、勝坂式固有のパネル装飾、単位文構成は、加曽利EⅠ式文様構成からは除外されていくのである。口縁部区画文、体部懸垂文に代表される加曽利EⅠ式文様構成は、地域的な意匠文様を受容しやすい区画文構成を拒否したのである。そのかわりに、非縄文懸垂文構成である信州系の土器群—曾利式・「唐草文系」・「郷土式」が加曽利EⅠ式文様構成を意識しつつも、組成に加わるのではないか。

次に、加曽利EⅠ式新段階の土器組成例と加曽利EⅡ式段階の土器組成を概観してみよう。「勝坂系」や「焼町類型」は確実に退嬰化し、組成から消えていく段階である。横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡ともこの段階から資料数は揃う。しかしながら、本稿は加曽利EⅠ式古段階の様相を提示することを目的としているため、今回は概略程度に止めておきたい。

(3) 加曽利EⅠ式新段階～EⅡ式段階

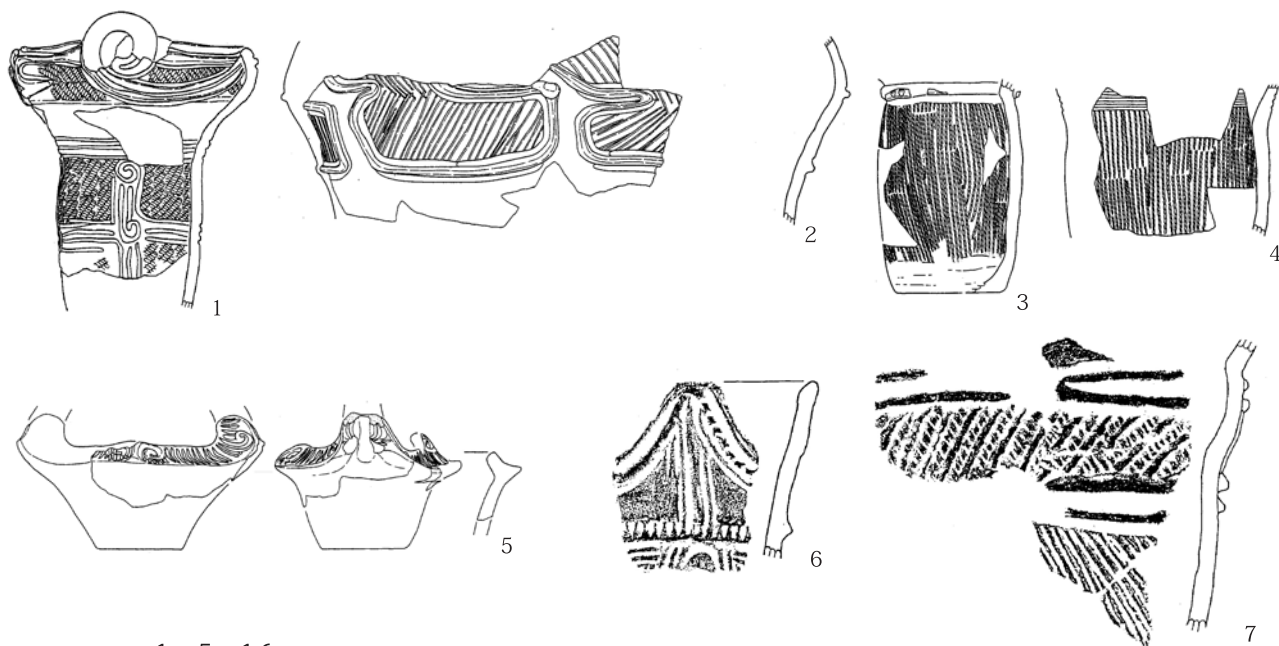
加曽利EⅠ式古段階では、「勝坂系」・「焼町類型」・中峠式諸類型が相伴する様相が把握されたが、加曽利EⅠ式新段階に至ると、口縁部文様帯の渦巻文と区画文が確立し、縄文を施文する加曽利EⅠ式文様と、非縄文である曾利式・「唐草文系」・「郷土式」などの信州系の土器群が加わる⁸⁾。いわば、縄文施文土器と非縄文施文土器との共存が恒常化する段階である。この相伴実態は、加曽利EⅡ式～EⅢ式にまで継続するのだが、中期後葉の後半段階の当地域様相提示は別稿で取り組みたい。

先に述べた、20区56号住出土土器群などは、EⅠ式古段階から新段階への過渡期の組成を示す例と捉えられよう。頸部隆線による口縁部文様帯の確立と懸垂文様の主流化は、この後、中期後葉土器文様を確実化する文様構成となっていく。

横壁中村遺跡20区12号住居跡、長野原一本松遺跡95区9号住居跡、横壁中村遺跡20区78号住居跡、20区43号住居跡出土土器を概観してみよう。

20区12号住居跡(11図)は浅く、住居範囲も確定できない状態である。遺存度は悪い。ただし、出土土器は炉周辺および床面からまとまって出土していることから、同時性を考慮しておきたい。

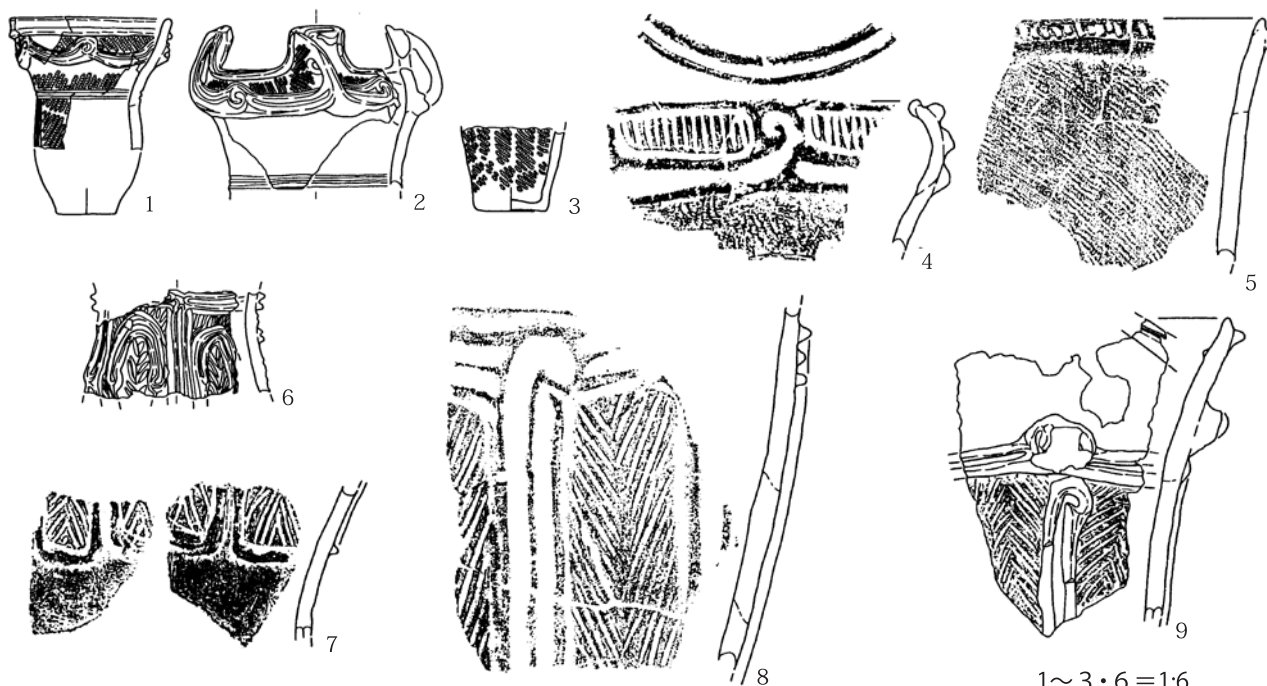
12号住1は口縁部渦巻状突起を欠損するが、弧線区画と棘状の意匠を付す。頸部無文部を隔て、体部は沈線



1~5=1:6

6・7=1:4

11 図 横壁中村遺跡 20-12 号住出土土器 (藤巻他 2005 より)



1~3・6=1:6

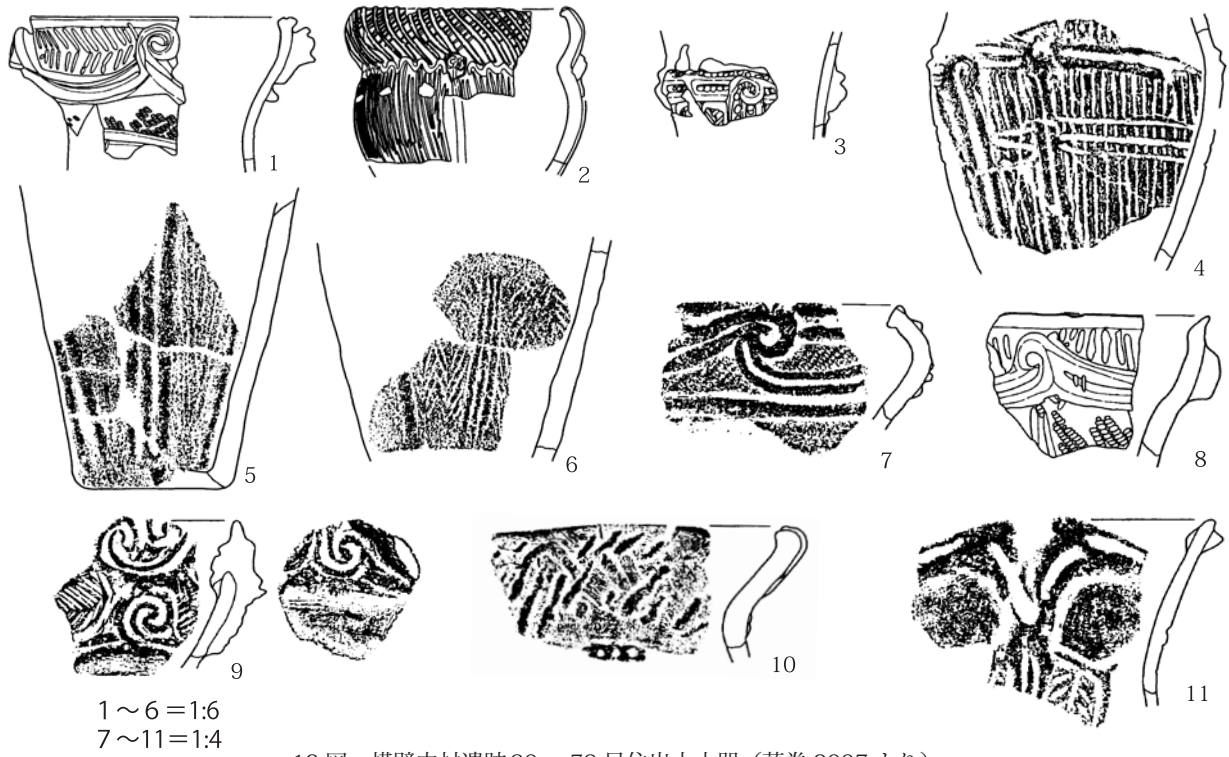
4・5・7~9=1:4

12 図 長野原一本松遺跡 95-9 号住出土土器 (山口 2008 より)

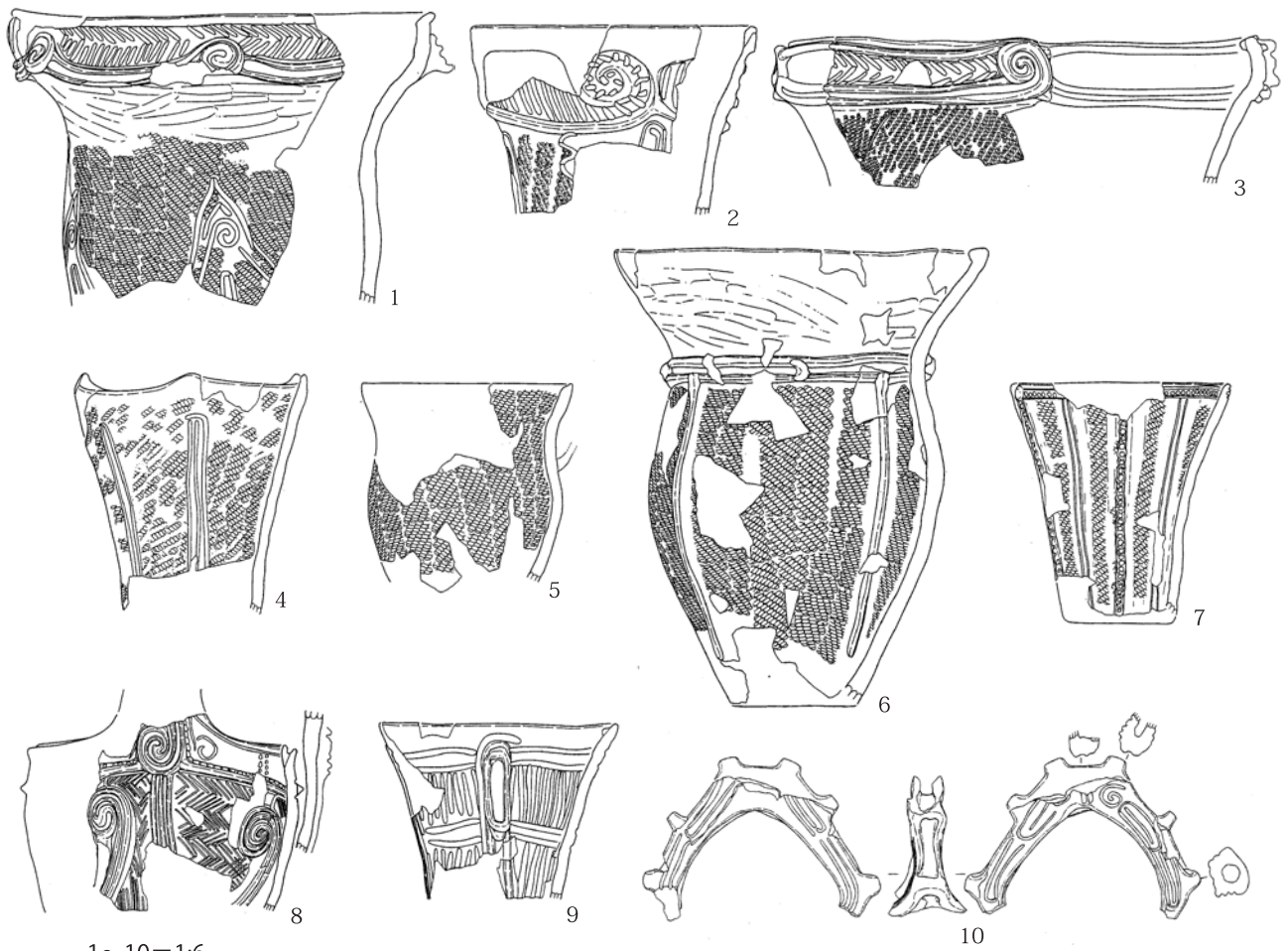
による方形区画文を配する文様構成である。体部縦位沈線上下端部に渦巻文を配する特徴が示唆的である。「唐草文系」あるいは「枳倉式」の文様要素を加曾利 E I 式が受容したのであろうか。地文には縄文 R L を施す。2 は異質な土器である。頸部より体部へ隆線による変形区画文が配され、斜位沈線を充填する。信州系であろうか、他に類をみないため判断を控えたい。3・4 は体部に縦位撚糸文を施す例である。3 の頸部には横位隆線が、3

は横位沈線 3 条が設けられている。5 は釣り手型土器であるが、おそらくこの段階から組成に加わる器種と判断できよう。他は破片資料であるが、6 は曾利式の口頸部~体部破片である。20 区 18 号住土器組成と同様に、曾利式の一部が、加曾利 E I 式新段階に吾妻川中流域に浸透してきたのであろう。

長野原一本松遺跡 95 区 9 号住居跡 (12 図) は変形六角形の平面形を呈し、掘り込みもしっかりしており、



13 図 横壁中村遺跡 20 - 78 号住出土土器 (藤巻 2007 より)



14 図 横壁中村遺跡 20 - 43 号住出土土器 (藤巻他 2005 より)

良好な遺存度を誇る住居跡である。出入り口施設を持つ住居構造を考える意味でも提供する情報は多い住居跡といえよう。出土遺物は散漫で、1は上層の出土でやや一括性が弱いかもしれないが、炉跡出土の2との時間差は少ないと考え、同時期と判断した。9号住1は、口縁部渦巻文と弧状区画からなる。2条隆線を区画線としており、区画内は横位RLを施文する。2は口縁部大型突起と橋状把手を付す小型深鉢。口縁部渦巻文と区画文構成で頸部無文帯を有す例で、1・2とも加曽利EⅠ式として確定できよう。3～5とも縄文施文する例で、4も加曽利EⅠ式の口縁部破片で頸部に縄文が施されている。一方6～9は非縄文施文の一群で、信州系と考えられよう。2条隆線による懸垂文構成を基準に、隆線両端から派生する区画文が体部に配される例がある。6・7は縦位隆線による区画文構成で、6は弧状あるいは環状意匠が配されるようである。「唐草文系」・「柝倉式」としての位置付けが妥当であろう。

横壁中村20区78号住居跡(13図)は、風倒木跡や他の住居の北壁の一部が重複するが、掘り込みの深い良好な残存を誇る。出土土器の一括性も保証されよう。78住1は、口縁部渦巻文と区画文が確定した加曽利EⅠ式に相当しよう。隆部渦巻文は強く突出し、2条隆線による口縁部区画文構成を呈し、区画内を横位矢羽状沈線文が充填する。体部上半に横位隆線を設け頸部無文帯を画す。地文縄文を施す。当地域のみならず加曽利EⅠ式新段階の典型例と捉えて良い。2～6は信州系の土器群である。2は、内湾口縁部に浮線と平行沈線による斜格子文が充填され、頸部蛇行隆線を経て体部は縦位沈線が覆う。曾利式である。3は頸部の幅狭文様帯下端より渦巻文を配した隆線が懸垂する。いわゆる「唐草文系土器」や「柝倉式」に見られる文様要素である。4の器形は「唐草文系土器」に見る樽状の形態だが、体部文様は「郷土式」に見られる縦位沈線充填後の横位沈線施文が充填される。体部の文様構成も単純な懸垂文構成で、「郷土式」の前半段階の例と考えておきたい。5・6は体部下半～底部の資料である。懸垂文構成に縦位矢羽状沈線を充填する例で、当地域の概期遺跡では普遍的に存在する一群であるが、単純な要素のため、「柝倉式」か「郷土式」との分別は明瞭には果たせない。破片資料では、8は既に体部懸垂文が口縁部直下より派生するEⅠ式～EⅡ式併行の文様要素を見せている。また、10は曾利式で2と同様にEⅠ式新段階以降に組成に加わる様相を補強する。

20区43号住居跡(14図)は北壁～東壁を傾斜のため逸失しているが、その他の掘り込みは深く、出土土器も良好な出土状態といえよう。縄文施文土器が圧倒するが、非縄文施文土器も2個体が個体図示されている。

43住1～3は口縁部渦巻文と区画文構成が顕著な例

で、頸部無文帯を画す体部上半の横位隆線を設けておらず、2は口縁部文様帯直下より沈線文が懸垂する様相からも加曽利EⅡ式併行に位置付けられよう。注目すべきは1の体部文様で、沈線による弧状意匠端部に棘状の処理が観察される。大木8b式的な様相と見る事ができる。しかしながら、この様な棘状や波状突出する意匠が、直接的な大木式の影響とは捉え切れておらず、広域な大木式の浸透によって、文様の一部が採用されたと考えておきたい。また、2の口唇部は幅広の無文部を設ける。この様相は、「郷土式」の口縁部文様帯を有する一群に顕著な要素で、加曽利EⅠ式終末段階～EⅡ式段階において、「郷土式」との関係が窺われるのである。一方3の口唇部は幅狭で、加曽利EⅠ式新段階に見る口唇部2条隆線と同様の要素である。1・2のようにEⅡ式相当の要素を確定している個体と、古相を示す3が伴出する時期として位置付けられる。4～7は縄文施文に覆われるシンプルな文様構成方法を示す一群。沈線や隆線による体部懸垂文構成を示す例で占められ、EⅡ式といえよう。8・9は非縄文施文の信州系の土器である。8は樽状の器形で口縁部突起及び体部に腕骨文を配するように「唐草文系」や「柝倉式」の範疇に入るのであろう。9は鎖状隆線による懸垂文構成で空白部を横位沈線で小区画し、縦位短沈線を充填する。体部を横位沈線で多段化する例は、20区78号住4などにも見られるように、当地域の「唐草文系」や「郷土式」にしばしば見られる。ここでは、「唐草文系」とするが、再検討が必要である。その他では、釣り手型土器把手部(10)の出土が見られる。

小結

吾妻川中流域における加曽利EⅠ式新段階～EⅡ式段階の土器様相をごく一部であるが提示した。既に曾利式や「唐草文系」、「柝倉式」「郷土式」が加曽利EⅠ式併行の土器群に共伴する様相が理解できた。この共存実態は、加曽利EⅡ式、EⅢ式古段階にまで継続し、特に「郷土式」の濃密な存在は、群馬県内でも特筆されるべき地域的特色といえよう。無論この段階になると、「勝坂系」、「焼町類型」といった、在地色の強い土器群は消えており、代わりに曾利式や「唐草文系」が加曽利E式土器と共伴する実態を示す。

まとめ

以上のように、吾妻川中流域における縄文時代中期後葉で、加曽利EⅠ式古段階に限りその土器様相を提示した。今回は、この加曽利EⅠ式古段階から新段階に至る間の土器組成変化を見出すことを一つの目的としていたが、組成変化の原因までは追求できなかった。

古段階1として、「勝坂系」としても勝坂3式から直接的な系譜が窺える資料を中心にその共伴資料を示し

た。最初に上ノ平Ⅰ31号住出土土器群に注意した。筆者自身、本資料は当該期の基準資料と位置付けている。大方は、勝坂式最終末として判断されると思われるが、筆者は共伴する「焼町類型」や中峠式諸類型の在り方から、加曽利Ⅰ式古段階と判断している。また、大木式系土器とも言うべき個体の共伴に関しては、当地域での8a式や8b式の良好な共伴例を見ないため、判断を控えたい。しかし、間接的であれ当地域に、大木式系の要素が浸透した証左として位置付けられ、今後の注意を要する。

同段階の資料とした、横壁中村遺跡の住居跡3軒の出土資料では、上ノ平31号住と同様に、勝坂3式あるいは「勝坂系」、「焼町類型」、中峠式諸類型の共伴が認められた。大木式系に関しては、欠落様相が見られるが、当地域では大木式が加わる組成は、上ノ平31住のような個体群が揃う組成様相に見られる現象かもしれない。共伴する「焼町類型」は、勝坂3式併行の「焼町類型」と比して、変容を重ねた様相であり、体部に区画文が配され波状縁を呈する例が見られ、鋸歯状口縁を設ける土器も見受けられる。さらに、北陸系の土器との共伴も見られ、当該期においては、土器組成上、複数の異系統土器群による共存現象が昇華した段階と位置付けたい。

加曽利Ⅰ式古段階2として集めた共伴例は、「勝坂系」が若干ながら新相を呈す一群を中心にまとめた。「勝坂系」は、ある程度その文様構成を保持する一群が見受けられるが、大方は体部区画文構成が崩れ、撚糸充填施文に偏る傾向も見られる。また、古段階1の「勝坂系」大型深鉢に見られた、縦位2連橋状把手による正面観の強調を果たす土器も希薄になるようだ。「勝坂系」のこのような変容は、中峠式諸類型や加曽利Ⅰ式相当の土器群との共伴による相互影響と見られ、「勝坂系」の自立性が失われていく過渡期と位置付けた。また、「焼町類型」は組成から客体的な存在となり消長を迎える⁹⁾。中峠式諸類型は、加曽利Ⅰ式併行の土器群との関連性を深め、相互の文様構成の同位から、加曽利Ⅰ式相当の土器群に内在化していくものと考えられる。

このように、吾妻川中流域の加曽利Ⅰ式古段階の土器群組成は、次代Ⅰ式新段階に変遷するに従い、組成の内容を徐々に変えながら、斉一化を迎えるのである。

加曽利Ⅰ式新段階やⅡ式段階には、信州系の曾利式や「唐草文系」・「郷土式」が当地域に濃密に浸透してくるのは、従来からの指摘されているとおりである。

無論、古段階に見られた「勝坂系」や「焼町類型」は直接的に曾利式や「唐草文系」には継続する土器群ではない。伝統的にある文様の一部分や施文手法などが、新段階の曾利式や「唐草文系」にまで踏襲されているかもしれないが、直接的ではなく、加曽利Ⅰ式土器以外は断絶する様相を示している。ここに、加曽利Ⅰ式古段階

から新段階への格差を観測せざるを得ない。残念ながら、この組成格差に関わる背景や要因まで、明らかにできなかったが、これは今後の課題としたい。

本稿では、「勝坂系」や「焼町類型」などが加曽利Ⅰ式古段階において、唐突に消えていくのではなく、古段階の中で変遷を重ねながら客体化していく様相を指摘した。おそらく、吾妻川中流域加曽利Ⅰ式古段階の土器様相は、他の地域に比しても、独自の変化を提示する内容ではないだろう。冒頭に述べた赤城山西麓域や西毛地域の概期土器様相の変化と大きな差は見られないだろう。しかしながら、今後、吾妻川中流域中期後半の土器様相を把握する上で、加曽利Ⅰ式古段階の土器組成を提示する分析は、基礎的な作業であり、今後の当地域の中期土器様相を捉える際に、一助になり得ると考え取り組んだ所存である。本来ならば、加曽利Ⅱ式～Ⅳ式段階も扱わなければならないのだが、資料の膨大さに圧倒され、今回はⅠ式古段階に限らせていただいた。Ⅰ式新段階以降の分析は、さらに検索を重ね、体力が許せば取り組みたい課題である。当地域における、加曽利Ⅰ式新段階以降の土器分析に際しては、長野県で培われてきた、八ヶ岳山麓の土器研究や千曲川水域で提起されてきた研究も重視しなければならない。一方、県境を越えた吾妻川中流域でも、信州系の土器群の在り方は、関東地方加曽利Ⅰ式土器との濃密な共存実態を提示し、中期土器群の在り方を私たちに提示している。この実態に答えるべく、さらなる土器理解を重ねなければならないだろう。また、冒頭でも述べたが、県内の中期環状集落跡も数量的にも揃い、土器以外の資料分析も同時に進めるべきである。特に、八ッ場ダム関連調査によって得られた資料は県内屈指の良好な資料である。土器論・遺構論さらには石器研究なども、進めていくべきであろう。

最後に、本稿に取り組むにあたり、多くの方にご教示・ご助言を得ている。特に平成25年縄文セミナーの関係者の方々には、長野県千田遺跡の資料を介して、ご指導をいただいた。記して感謝したい。

石村千恵美 黒澤照弘 篠原了子 鈴木徳雄 関根慎二
高橋清文 谷藤保彦 寺崎裕助 富澤友理 中嶋公江
日沖剛史 水沢教子 綿田弘実

註

- 1) 山口逸弘 2000 「道訓前遺跡Ⅰ出土の三原田型深鉢について」『道訓前遺跡』北橘村教育委員会 において、「焼町類型」・「三原田類型」・「勝坂系」といった、中期中葉末～中期後葉の土器群を扱い、加曽利Ⅰ式古段階にまで、これらの特徴的な土器群の一部が継続し変容する様相を示した。
- 2) 本来ならば、加曽利Ⅰ式最古段階を設定し、最古段階・古段階・新段階として、加曽利Ⅰ式を考えるべきだが、共伴する類型群の在り方が複雑であり、明瞭に区分はできない。今回は1・2として、

- 古相と新相を提示したが、組成の変化を中心としており、時間的な変遷を提示していない。
- 3) 山口逸弘 2000 「「勝坂系」という末裔たち—勝坂式以降における文様構成の伝統と収斂化—」『群馬考古学手帳 10』P15-P30 群馬土器観会
- 山口逸弘 2010 「「勝坂系」土器に関する再検討」『研究紀要』28 P65-84 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 において、県内の中期後葉初頭段階に勝坂 3 式終末段階の一群が継続する様相を分析し、「勝坂系」として論を進めてきたが、未だ有効な名称を定めていない。反省点ではあり、今後の課題としている。
- 4) 福田貫之 2007 「「道訓前類型」に関する覚書」『上毛野の考古学』P21-P28 群馬考古学ネットワーク編
- 5) この時期に鋸歯状口縁は以外に類例が少ない。周辺遺跡では、東吾妻町郷原遺跡に少量が見られる程度である。ただ、横壁中村遺跡でも、少量ながら出土しており、さらに長野県や新潟県にも点在する様相を示す。いずれ集成・検討を加えるべき土器群である。
- 6) 「勝坂系」における縦位 2 連橋状把手は正面観の強調効果もあるが、体部とも連接する文様構成が多く、区画文構成を主とする「勝坂系」において、懸垂意識の高まりとも捉えられる。また、「焼町類型」にもこの縦位 2 連橋状把手はしばしば設けられ(1 図 1)、「勝坂系」や「焼町類型」から受容した文様要素とも考えられる。
- 7) 筆者が「勝坂系」とした土器群の標準タイプであり、樽状あるいは甕状の器形を呈し、体部上半に一带構成で環状意匠や人体状意匠を配す例である。
- 8) 「唐草文系」土器の定義された土器様相の範囲は広く、千曲川流域に分布する「枥倉式」・「郷土式」の一部も含まれるようだ。今後、明確な分離が必要であり、同時に群馬県における両者の併存状況も明らかにし、信州系土器群の内容を吟味するべきであろう。
- 9) 「焼町類型」の消長に関しては、加曽利 E I 式古段階に求められると考えてはいるが、例えば東吾妻町小泉宮戸遺跡 27 号住では加曽利 E I 式新段階の土器群に「焼町類型」の変化した例が伴出している。「焼町類型」の一部が伝統的に残存した例と考えられるが、出土状態も含め今後の検討を要しよう。

参考文献

- 赤山容造 1990 『三原田遺跡』第 2 巻 群馬県企業局
- 池田政志 2006a 『横壁中村遺跡 (3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 池田政志 2006b 『横壁中村遺跡 (4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則 2012 「型式転換期の実態—勝坂式最終末・加曽利 E I 式古段階の諸相—」『埼玉考古』47 埼玉考古学会 P21-P40
- 石塚和則 2003 『丸山遺跡』埼玉県狭山市遺跡調査会
- 飯森康広 2006 『立馬 II 遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大賀健他 1997 『新堀東源ヶ原遺跡』松井田町遺跡調査会
- 大村裕他 1985 「勝坂式土器の研究」『下総考古』8 号 下総考古学研究会
- 大村裕他 1998 「中峠式の再検討」『第 11 回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 小野和之 2007 『長野原一本松遺跡 2』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小野和之 2009 『長野原一本松遺跡 5』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜岡正信 1988 「勘場木遺跡」『群馬県史 資料編 1 原始古代 1』群馬県史編さん委員会 P695-703
- 佐藤達夫 1974 「土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
- 瀧川伸男 2008 『上ノ平 I 遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋正充他 2003 『町内遺跡 I 小泉宮戸遺跡』吾妻町教育委員会
- 谷井彪 1992 「富士見市鶴瀬出土の勝坂系土器について—円筒系土器に見られる縦位区画文の検討—」『研究紀要』14 埼玉県歴史資料館

- 富田孝彦 2000 『坪井 II 遺跡』長野原町教育委員会
- 中沢悟他 2008 『幸神遺跡・上原 IV 遺跡・山根 III 遺跡 (2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川福次 1999 「道訓前遺跡 II 遺構・遺物」『北橋村村内遺跡 VII』北橋村教育委員会
- 長谷川福次 2001 『道訓前遺跡』北橋村教育委員会
- 藤巻幸男・大工原豊 1985 『郷原遺跡』吾妻町教育委員会
- 藤巻幸男他 2005 『横壁中村遺跡 (2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻幸男 2007 『横壁中村遺跡 (5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻幸男他 2009 『楡木 II 遺跡 (2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 松島榮治・福田貫之・山口逸弘 2005 「嬭恋村今井東平遺跡の紹介—1 区縄文時代中期土器資料を主に—」『研究紀要』20 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 松原孝志 2002 『ハッ場ダム発掘調査集成 (1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51 長野県考古学会
- 諸田康成 2002 『長野原一本松遺跡 1』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 諸田康成 2008 『長野原一本松遺跡 3』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山口逸弘 2008 『長野原一本松遺跡 4』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山口逸弘 2004 「群馬県における「焼町類型」の位置—異系統土器共存の一視角—」国立歴史民俗博物館研究報告』第 120 集 国立歴史民俗博物館
- 山口逸弘 2008 「中期住居跡の北壁施設—長野原一本松遺跡の事例から」『考古学の窓 2』國學院大學卒業生・発掘者談話会 in 群馬